ひかりのキミ・・・　（番外）

月雲　花風

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東雲秀司（しののめしゅうじ）と北山達也（きたやまたつや）のＳＥＸがらみの話です。ただ、書き手の私でさえも思いもよらぬ言葉を東雲が、北山に言ったのでびっくりです。

目次

第1話 …… 1

第1話

朝、いきなり東雲・・・シノは、不機嫌だった。不機嫌とは違うな、何がどう違うか俺にはわからないが、でも普通じゃないことは確かだった。キスを拒んだのだ。

「わるい・・・気分じゃないんだ。ごめん。」

の一言で事態の収拾を図った。その場を離れて俺の視線を誤魔化していた。大学にはシノが先に向かった。釈然としないまま、俺は午後一の講義までの時間、本屋と図書室にいた。バイトでシノは週四日夜が遅い。もっともこのアパートでシノを抱くのはきついけど、マメだと思っていた。釈然としないものが残ったので、ホモバーにむかった。久しぶりだ。

「こんばんは～。」

「おっやぁ～～～～いらっしゃい。

ホント久しぶりねぇ。どうしたの？彼ができてから来なかったのに・・・喧嘩でもしたの？」

「ちょっと相談が・・・ママいるかな？」

「めずらしい。そこ掛けてて・・時間空いたら、くると思うから。」

釈然としないものが何か・・・俺がはっきりわかってないと、これからがやばい気がする。

シノはのんびりした育ちだが、自分に納得がいかないのを嫌う。俺は性格だろうな、納得できないとことん追及してしまう。俺たちは、俺がしっかりしないと絶対別れることになる、と思っている。俺が中途半端に誤魔化しても、シノは絶対納得しないだろう。それはやばすぎる。

ドリンクのカップを持ってため息をつく。何度目だろうか・・・

「あんた本当に困ってるみたいねぇ。ちょっと話して見なさいよ・・・。」

「あのさ・・・ネコって、何か変わるのか・・・な？」

驚いた顔で見つめられた。

「あんた、本当に困ってたのねぇ。びっくりしたワ！」

「でなきゃ，金も無いのにこねぇよ!!」
マジ金はない。なじみでなきゃこんな店来れるはずもなかった。だが、用は相談だ。将来のためだし・・今解決できるのだったらしなきゃいけない。
いらっしゃいませ～!と、聞いた声がする。ママが来たのだった。
「いらっしゃ。聞いたわよ・・・それ飲んだら帰りなさい。終業時間にいらっしゃいな。金の無い
奴が無駄金使ってるんじゃないの。」
「あ・・・ごめん。解った・・・じゃ、一時頃に、表からでいいのかな？」
ママが、俺の顔見て大きく息をついた。
「本当に困ってるのね。それでいいわ。まってるからね・・。」
アパートに戻る。シノはバイトで居なかった。だが店に行くには、シノとすれ違う。メモを残して出かけた。
同姓の生活がホモだからってわけでもないけど、それでも、俺より生きてる時間が長い分わかってることは多いだろうと、相談には乗ってもらっていた。ネコに関してまったく解らず、もっぱらホモバーのママにするしかなく、他の奴は・・・たまに浅葱さんに声掛けさせてもらっていた。
シノに何かあったなんて学校でも聞いてないし・・・シノ自体がそんな風ではなかった。だったら生活のことしかない。
人も最終電車が近い分、まばらになってきていた。すれ違う人も少なく・・。急ぎ店に向かった。
「こんばんは。」
「まってたわよ。」
店は客が居なかった。ママ一人だけで、ホストも見えない。俺はなんとなくようやく息がつける気がした。
「さっきはごめん。」
「はい。お酒はだめよ。」
ソフトドリンクでのどを潤す。
「ちょっと聞いたのだけど・・・ネコの相談って、東雲君のことなの？」

カウンターを挟んでタバコを吸いながら、ママが立っていた。
「東雲君はバイト？」
頷く。ママが息ついて言葉にした。
「何なのか解らないけど、彼も来た方がよかったんじゃない？結構かれも頑固そうだし・・」
「いや・・なにから相談していいのかわからなくて・・・こんなことママ・・ってか瀬尾さんしか
できないから。」
「なんなのよ？相談って・・・」
「・・キスができなくて・・・・」
瀬尾さんの顔が思いっきりあきれ返ったようになった。気がついた発端はそこだし、とりあえず話を続ける。現状の生活を話すしかなかった。
「達也・・・あんたは、どのくらい東雲君を抱いてるの？」
え・え!!!いきなりそこかぁ!!
「決めは無いけど・・・週に2，3回ぐらいかな。夏以降は・・・そういやぁここ二月はないかな
・・・」
大きくため息を瀬尾さんはついた。
「それね。・・でも、あんた自覚が無さ過ぎるわ。わかってるの？東雲君の体のこと・・・」
「え？・・病気とか？・・・体って、あいつ何かあるのか？」
瀬尾さんは頭を抱えた。カウンターから席に場所を移して向かい合って座った。グラスも改めてもらった。
「東雲君。ずいぶん苦労してるわねぇ・・・」
確かに時々、なんか熱っぽそうにしたりすること有るけど、聞いても返事はないし・・・。たぶん、シノも解ってないんだろうな、もしかすると・・・。
「今までにも話、聞いてきたけど・・東雲君が完全にネコなのよねぇ？・・彼、気がついてないの
かしら・・・」

タバコを噴出してから話を続ける。
「体って変化するのよ・・・ネコの場合。ちんちんが取れるとか胸がでかくなるとじゃ無くてね
周期見たいに、抱かれることを体が望むの。」
え・・?それって・・・・考え及ばない俺はほうけた顔してただろう。あきれて瀬尾さん話を続けた。
「東雲君がそれに気づいてないんじゃ、今すごく大変だわね。・・・かわいそうね。東雲君」
「じゃ・・キスができないって・・・」
「キスだけで変化してしまう体が怖かったんでしょうね、彼は。」
瀬尾さんににらまれてしまった。タバコをもみ消して、新しい奴をだす。
「あんた、本当にわかってるの?あの子、ノーマルだったのよね?」
「お・・俺。シノが何もいわないし・・・俺が・・・。」
「あんたがどれだけあの子、かわいがってるか話を聞けばわかるわ。寝始めて、1年経ってないの
に体が変わってくるって、よっぽど愛があるのよね、相手に。」
俺の狼狽に言葉なく瀬尾さんが話を続ける。
「達也。
あんたはここで相談も出来るからいいけど、あのこは一人で抱え込んでるのよ。あのね・・・自
慰も変わるのよ。私が知ってるわけじゃないけど、暮らしたことある子がねそう言ってたわ。」
シノ、それもできなかったのか?解らずにいて、もしかして、病気だと思い始めてるとか・・・。急に寒気が走った。俺は、自分が好きな奴を変化させてしまった?元に戻れない?・・・それって・・
「前だけじゃ、だめなんだって。後ろにも指、使わないと・・・東雲君、自分の体の変化、どう受
け止めてるのかしらね。変化だって気がつけばいいけど・・・気がついてもねぇ。」
たぶん血の気が引いて青かったのかも。俺の変化見ていた瀬尾さ

んは、慌てて続けた。
「それだって、別な生活が続けば変わるでしょうから・・・よく知らないけど。あんただけのせい
じゃないのよ!解ってる?」
煙を噴出して、瀬尾さんが言った。
「いいから帰りな。東雲君、待ってると思うから・・・ちゃんと話してね。彼に・・・」
「ありがとう。今度シノも連れてくるから・・」
慌ててがたがたと店を飛び出した。終電に間に合ってよかった。座ることもせず、東雲のことだけを考えて入り口に立ち尽くしていた。
アパートは真っ暗だった。東雲はもう寝たのかもしれない。だが話をしなければ・・・
「シノ・・・寝た?入るぞ・・」
ふすまを開けるとなじみのある香り。もしかして・・・
「シノ・・・いけたのか?」
ベッドに近づく。畳に上着を置いてるときシノの気配がした。
「おかえ・り・・俺、いけない・・・病気なのかも、どうしよう・・・」
不安でいっぱいの声。もしかして・・泣いてたのかも・・・
「う・・しろ、使わないと・・いけない。こんなこと無かったのに・・・。」
明かりのスイッチを入れる。薄明るくなった。シノは掛け布団で下半身を隠したまま起き上がっていた。顔色は恥ずかしさで赤っぽくも見えるが・・・体も震えてるように見える。
「俺の体・・変だ・・・昨日の晩、キスしたときからおかしくて・・ごめん。今朝もまだ残ってて
キスできなかった。俺・・病気かも・・やばいのかな、でも、・・洗濯物は別にしてあるから気
にしなくていいと思う。一緒に洗ってないし。」
「洗濯物って・・・いつから?」
「一緒に洗わなくなったのは2週間前ぐらい。・・体がおかしく感じ始めて、二週間も黙ってて、

ごめんよ。」
ベッドに腰掛けるとシノを抱きしめた。
「わるい。ごめんよシノ。一人で不安抱えてたんだね。ほんとにごめんよ。」
「達也？」
秀司にキスすると、立ち上がってる秀司のものに口付け含んで愛撫する。
「だ・だめだ。やめろ・・・やばいか・・ら・・・・う・あう・・」
時間かけずに秀司は俺の口の中に放った。
「はっ・・・どうしよう。達也・・吐いたほうがいい・・お・俺・・・・」
俺は服を脱ぎはなつ。
「た・・・達也？だ・・だ・めだ・・・って・・あぁ・うん・・ひあぁ・・」
シノは拒もうと、腕をつったてるが、体は俺を受け入れてるのだから・・役立ちはしない。すんなりシノの中におれ自身が納まってしまった。入れたまま、口付け首脇に舌を這わせ、鎖骨をなめて乳首に達する。乳首を吸い上げ噛み付き舐める。それで、シノの声は変わる。
「うん・あふ・・・ひぁ・・・ああ・ん・・・」
「秀司・・・」
俺の声に秀司が腕を背に回し、抱きしめる。
「き・気持ちいい・・達・・・也。・・うれしい・・」
「動くよ」
秀司の腕に力がこもる。了解ということだ。一度・・・グンと入れただけで秀司が声を上げた。
「あ！・・・あぁぁ・・・」
２度目の到達？腕がずりおちて、俺が腰を使う。口づけ愛撫し・・腰を使えば、秀司はすがりつき、腰を動かす。これは体の要求？自然の成り立ち・・・。でも秀司は気がついてない。体が俺を求めることに・・・。改めて自分の選んだパートナーを眺めてしまう。
体格はスマートなほう・・かな。いらない肉が無い体系？って、感じか・・。黒髪しっかりしてるが細め。十人並みの顔だと思う。でも、

ノーマルも夜は娼婦って感じか。
我慢も聴かなくなって、上り詰める。
「ぁ・・ぁ・・うぅん・・ぁぁ・・ああ・ああん・・」
秀司の声がきわまって、俺も達する。秀司の上に体を重ねる。抜かぬままだった。
「秀司、・・・体の変化は気がついてなかった?。」
「達也・・抜いて。このままじゃやだ。」
「俺もやだ。秀司の中に居たい。」
「・・・この格好嫌いなの知ってるじゃないか。いじわるだな・・・。」
キスをする。
「体・・気がついてた?」
視線を外せず、目を伏せる秀司。
「はっきり・・ちがってるって、そう、思ったのは・・・二週間前だ。オナニーして・・・後ろ
使わないといけなかった。その時、おれ・・・変って?」
意を決したような視線で俺を見つめてる。
「なぁ、俺どうなってるんだと思う?・・・もしかして、達也に抱かれたいってなってきてる?
そういうことかな・・・?」
「もし・・・そういう風になってたら・・・そうだったら、どうする?」
秀司の目に、見る間に涙がたまり始めた。
「俺、男だし・・・
なぁ、達也は一生を俺と歩くつもりなのか?もしそうなら、俺、体が変わっていくのは拒否し
ない。いろいろ変わるかもだけど・・二人だったら行けるさ」
思いっきり抱きしめる。長い・・・長い口付けをする。
「・・た・達也、どうした?・・・す・け・べ・・ぁぁ」
「もう一度・・・秀司、愛してる。・・動いていい?」
秀司の腕が、俺の背を抱く。キスに始まって、目立たぬ所にキスマークを、俺の印。首筋を舐めて、鎖骨にマークを・・・。わき腹に

マークをつけまくって内腿に・・・。俺の秀司。俺の最高のパートナーをみつけた。大事な相手・・大切な相手を。
「ぁぁ・・ぁぁぁあ・あん・・・ぁぁああ」
二人で一緒に達する。秀司を放して隣に横になる。掛け布団を秀司が掛ける。
「達也・・?」
「俺・・・秀司にはかなわないのな。なんでお前そんなにいい奴なんだよ!!」
秀司が頭を殴る。
「いい奴は、お前だって同じだろう。達也。」
秀司が見つめる中、達也は涙を零し始めた。秀司があわてる。
「え?ええ?!ごめん。いたかった?どうしたんだ・・・ごめんよ?」
「俺・・俺。死ぬまでお前と歩く。どんなになってもお前と一緒だ。絶対離さない。秀司、愛してる。」
達也に腕を回して抱きしめた秀司。そしてキス。
「二人でがんばっていこうな。」
秀司の匂いの中で、声を上げて泣いてしまった。
俺はどんなことがあっても後悔しない。秀司がいるのだから・・・しっかりと歩いていこう。
大学を卒業した年、秀司は家族に告白して、勘当をくらった。

＊＊

＊おわり＊＊＊